

今日ひとり島の人口減りたりきボツリボツリと雨のたそがれ
梶尾利徳

五島列島の一つ中通島に住む作者。夫に先立たれて、わが子がいる街でいっしょに住むことになって、島を出て行った「媼」をうたう一連中の作。「媼」という古い言葉をあえて採用することで、物語めいた雰囲気をかもしだしている点、「ボツリボツリと」が上へもしたへもかかっている点がポイント。頼綱がまだ幼かった三十余年昔、梶尾君にさそってもらって中通島へ海水浴に行ったことがあった。美しい広い浜に、数人しか泳いでいない、すばらしい海岸だったことを思い出す。

ハルシオンデパスアモバン
レンドルミン 続く白夜に
生きる人への 月丘ナイル

冒頭のカタカナは、「ハルシオン」「デパス」「アモバン」「レンドルミン」という四種の薬品名。いずれも睡眠導入剤だという。医師である作者が眠れない患者へ処方している場面だろう。眠れない夜を白夜に比喩した工夫に注目。

一瞬をとまどい女神のブロンズの腹部を握り扉をあける
美帆シボ

ドアの取っ手が女神像になっているのだ。気づかなかればどうということもなかったのだろうが、気づいてしまったとまどい。「一瞬を」がベストだったかどうかは議論の余地もあるが、一首、ユーモアの味も感じられて魅力的である。

万力のごとく頭を寝台に固定する機器メイフィール

短歌の現在

No.444 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

下に血

患者はいつたいたうなつてしまつたか？ 結句「血」

高橋秀

にぎくつとさせられる。読者を心理的屈折へ誘導する趣向である。作者は医療機器の洗浄などを担当している。たいへんな仕事なのだろうが、考えようによっては、題材に恵まれているとも言える。

右肘に痛みが走り持てるモノ持てないモノが分かれる年の瀬
矢代朝子

意外な基準で分類されることとなった日常。背の高さで届くところと届かないところがあつたりするのは恒常的なものだから気にならないが、これはちがう。切れ味のいい一首と思う。

眼にみえぬ鬼神いづくに隠れをる風なき夜半の庭の

玉砂利

中村佳文

第一・二句はもちろん『古今集』仮名序の一節を踏まえている。いわく「力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはりげ、猛きもののふの心をも慰むるは歌なり」。和歌の力を論じた核心的な部分である。この作、自身の歌の「あはれ」を思ってくれるはずの鬼神を探している場面か。

出席簿に斜線の続く行ありてキラキラネームの姫は
目覚めず
児島直美

端的かつ切れ味のいい下句に感心した。連日遅刻してくる女生徒がいるのだ。内心ケシカランと思っているのだろうが、まあ、ここでは距離をおいて楽しい一首にしている。